

6 抜歯後に応用される漢方薬について

藤井佳朗

医学の進歩とともに、歯牙保存療法も発達し、以前では抜歯を避けられなかったような症例においても保存可能な症例が増加してきた。しかし、歯周病の重症例を中心に抜歯以外に施術法がない場合も多い。抜歯後は抗生物質、消炎鎮痛剤、消炎酵素剤の投与などが一般的である。

抜歯後に応用される漢方薬としては立効散がよく知られており、有効性の報告も行われている。今回、演者は抜歯後投与の漢方薬として立効散と排膿散及湯を主体に古典文献的検討を行ったので報告する。

曲直瀬道三著『衆方規矩』の牙齒門に、加味清胃散とともに、新附薬方として立効散が記載されている。

牙齒痛んで忍び難く、微し寒飲を悪み大いに熱飲を悪

み、脉三部陰盛んに陽虚す。これ五臓内に盛んに六腑陽道の脉微小にして小便滑数なるを治す。(中略)頃く痛む処に喰んで痛立ち処に止む。(中略)按ずるにこの方東垣が方にして牙齒疼痛を治する神なるものなり。

とあり、急性化膿性歯髓炎などに対して応用されていたと思われる記載はあるものの、抜歯後に応用したというような記載は認められない。

漢方薬応用に際しては「随証施治」「方証相對」の原則にしたがって患者の証に応じた薬方を選定しなければならぬ。本文から推察される立効散の証は陽虚証と思われる。

ちなみに加味清胃散の記載を以下に示す。

専ら胃火によりて血燥き唇裂け或いは齒唇となり或いは牙齦潰爛して痛をなすを治す。(中略)右煎じて頻々に喰み嚥む。齒齦浮腫して痛忍び難き、これ胃中に湿熱あり、山梔子、玄参を加う。按ずるに牙齒の痛を治するの主方なり。

とあり、やはり抜歯後の応用例については言及されていない。

一方、排膿散及湯の記載であるが、本方は尾台榕堂著の『類聚方広義』のなかに記載されている排膿散の注釈のなかに認められる。

東洞先生合此方排膿湯名排膿散及湯治諸瘡癰兼用應鐘再造伯州七寶各隨其症骨槽風膿潰後不収口者毒之根帶必著齒根故非拔去其齒決不得全治也須先拔去其齒而後與此方必有効兼用伯州散時以梅肉下之

とあり、齒周病のために拔去したのちに本方の応用を推奨していると思われる記載が認められた。

(名古屋市)